

16世紀末越後国の石高（米等の生産高）と人口

(1) 石 高

16世紀も終わりに近づき、長く続いた戦国時代も織田信長とその跡を引き継いだ豊臣秀吉によって全国統一がなされようとしていた。その統一の証が、天正18年(1590)から19年にかけて全国20か国におよんだ太閤検地であった。

越後の支配者上杉謙信もその生存中は上郡・中郡は直轄領化を進めつつも、下郡（阿賀北地方）においては越後国の盟主としての軍事上の指揮権を確立したばかりで、統一した検地による国内の把握はなされていなかった。

天正6年(1578)から同8年にかけての御館の乱に勝利をおさめ、上杉謙信の跡を継いだ景勝は、全国統一を進めていた豊臣政権と結ぶことによって領国越後の統一を図ったが、天正18年の太閤検地は自領内では実施できず、文禄3年(1594)の色部差出に見られるように在地土豪から申し込させることによって、太閤検地の全国統一基準である石高制で上納高を調べる程度であった（定納員数目録の作成）。

在地土豪の雄であった本庄繁長を改易し、その所領と城を景勝の信頼する上田衆出身の大国実頼と春日元忠に支配させてから5年後ようやく越後の検地が行われたが、これは太閤検地から遅れること6年の慶長元年(1596)から2年にかけてであり、それだけ中世的土地支配をする在地土豪の力が強く、兵農分離が進んでいない後進地であったことを示している。

この検地が終了して間もない慶長3年正月に秀吉から会津に移封の命を受けるのであるが、そのタイミングは検地による石高がまとまるのを待っていたかのようである。そして、その命令書である秀吉朱印状には「当時田畠を持ち、年貢を納めるよう沙汰され、検地帳に記された百姓は一切召し連れてはならない」と書かれていたにもかかわらず、同年3月の会津移封に当たっては未だ兵農分離が進んでいなかったため命令が守られず、耕作する人の居ない田畠が各地に続出し、後任として同年4月入封してきた堀氏との間に約束違反の問題が残り、また、残存した住民と堀氏の「兵農分離の支配体制（近世へのスタート）」との意識の違いが、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いの時の上杉遺民一揆につながっていくのである。田畠を拓き年貢を納める人が、有事の際には武器を取って戦う人と同一人である体制下での正確な検地は無理で、そこにはいろいろな事情が入り込む要素があり、完全な石高の把握がなされず、少なめになる傾向があったようだ。例えば、この検地の結果をとりまとめたのが、現存する越後国頸城郡絵図と同瀬波郡絵図であるが、ここには数軒の集落でも細かく集落名・本納高・縄高・軒数・人数（瀬波郡は軒数のみ）、知行主名等が記されているが、有力土豪である色部氏の平林、元本庄氏の猿沢、鮎川氏の大葉沢、柿崎氏の米山寺・芋島等本貫の地（本拠で大きな知行石高）が記入されていない。また、神社仏閣などの支配する土地（西山町の二田集落の物部神社は神領1,070石で、二田城を築く力を持っていたといわれる）が相当大きな広さになっていることから想像がつく。このように

正確さを欠く資料でも残っている場合は、これを基にして推定もできるが、前述のように頸城と瀬波両郡しかないので、次のような作業で推定することにした。

- (1) 慶長元年から2年にかけての検地後は、堀氏を初め領主が変わるごとに、部分的な検地を含めて何回か検地が実施されているが、その中で天和元年(1681)高田藩越後中将松平光長家が「越後騒動」により改易になり、その遺領を幕府が一斉に検地を行った。この検地は今までの手直し程度の検地と異なり、検地内容の条目が細かく決められ、その後の江戸時代での検地の基本となったものであるが、それ以前の検地よりも45%も石高が増加する等あまりにも内容が異なるので、正保絵図(1645頃)に記入された石高を基に、不明なところは1680年までの資料によって修正する。具体的には慶長絵図(1596頃)と正保絵図(1645頃)の両図ともに記入されている石高から、現在の市町村単位の範囲で地形が似ているものを分類し、次の表のように比率を決め、慶長絵図の無い所は正保絵図等の石高をこの係数で割返して計算する。

地 形 の 分 類	正保図／慶長図
最も開発しやすい（山裾・扇状地を含む平地が多い所）	1.4
開発しやすい（平地が大部分の所）	1.6
灌漑技術の発達により拡大（山間地・台地等）	2.0
排水・流水制御技術の発達により拡大（沼沢地等）	3.0

- (2) 米等の生産高以外の物では、越後布の材料である青芋^{あおそ}が特産品として栽培され、大きな収入になっていた。堀秀治が越後へ移封になったときの知行あてがい状に「1. 五千石、御蔵入 但越後布出所、同其廻」となっており、越後布の積み出し地からの収益を豊臣政権が直接取立ることになっている。このことは青芋による縄高相当の収入は10,000石以上あったことになる。
- (3) 漁業・塩業等海岸で生活をしている集落の場合は、縄高は小さいが本納高は大きくになっている。大潟町と上越市直江津地域の越後国頸城郡絵図に書かれている縄高の合計は76.2石であるが、本納高は335.6石で、その差は260石になる。これは縄高に換算すると520石に相当する。

これを越後国海岸線全体に換算すると2,000石ぐらいになるのではないか。

- (4) 港として栄えていたのが越後では、北から岩船・新潟（沼垂）・出雲崎・寺泊・柏崎・直江津がある。このうち、青芋の主積み出し港の柏崎を除く四か所は700人規模の集落として存在した（人口の算出を参照）とすると、2,800人の人々が生活するための換算石高は0.38人／石から約7,300石となる。

以上のような仮定による計算の結果、越後国の米等穀類の総石高は372,800余石（ただし、当時会津領であった東蒲原四町村は除く）となった。これに青芋分10,000石、海産物等2,000石、港からの7,300石を加えると392,000余石となる。

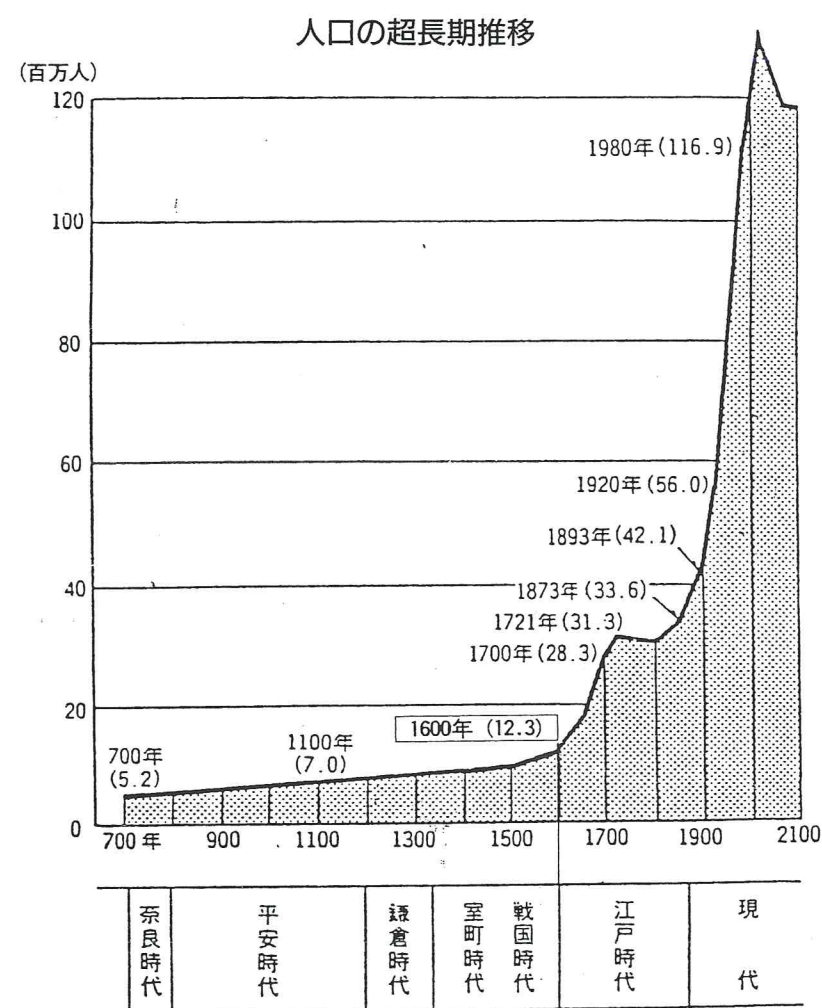
参考 堀秀治受封の秀吉朱印状（堀家文書）に次のように明記

越後国45万石（内本高39万770石 一割半増高5万8千300石）

上杉氏が会津移封前の越後国の石高は39万石と言われているが、その後へ越前より秀吉の命により越後国に封じられた堀氏の石高45万石は、豊臣政権から上杉領は隠し財産があると見られていたか、まだ努力すれば生産高が増えるとの見込高であったのである。その結果が1,600年代の新田開発が進み生産高の急増につながったのではないだろうか。

(2) 人口

日本の国の人口の正確な数の把握は、現代に入って国勢調査が実施されてからであるが、その推移は、社会工学研究所の日本列島における人口分布の長期時系列分析と人口問題研究所の将来人口新推計によると次の図のようになる。これによると中世も終わりに近づく1,500年代までは増加率が小さいが、戦国時代に入ると増加率も大きくなり、近世の始まる16世紀末には1,230万人と推定されている。この人口数は現在の20世紀末の約1/10で、この400年間の人口急増が理解できる。



(備考) 総理府統計局「国勢調査」、厚生省人口問題研究所「将来人口新推計(56年11月)」および社会工学研究所「日本列島における人口分布の長期時系列分析」による。

では、この400年前の越後国の人口はどのようなものであったろうか、単純には新潟県の佐渡を除く現在の人口240万人の1/10は24万人であるが、実際はどうであったか推定して見よう。

慶長検地等の資料から次のように推定のための数値を算出する。

○ 農村集落

越後国頸城郡絵図(1598年頃検地) 家の軒数・人員共記入されている。

一軒当たりの人員……3.7人(平均)

越後国瀬波郡絵図(1598年頃検地) 家の軒数は記入、人員は記入されていない。

色部領内 縄高10,682石 家数 1,080軒

同 人口 $1,080 \times 3.7 = 3,996$ 人(推定)

縄高石当たり人員 $3,996 / 10,682 = 0.38$ 人/石(推定)

生産石高によって基本人口が推定される。

○ 港町

岩船町 1594年 166軒 $\times 3.7 = 614$ 人(推定)

1735年 754軒……この間 $754 / 166 = 4.5$ 倍に家数増加

直江津 1742年 830軒(資料有り)

(今町) 1598年頃 $830 / 4.5 = 184$ 軒

同 人口…… $184 \times 3.7 = 681$ 人(推定)

柏崎町 1714年 942軒(資料有り)

1598年頃 $942 / 4.5 = 210$ 軒

同 人口…… $210 \times 3.7 = 777$ 人(推定)

出雲崎 1789年 768軒(古くから佐渡への港、資料有り)

1598年頃 $768 / 4.5 = 171$ 軒

同 人口…… $171 \times 3.7 = 633$ 人(推定)

以上の例からの平均人口は677人となるが、港町として商業を中心に栄えた町の人口を700人とする。

○ 城下集落

本庄村(本庄氏) $252 \text{軒} \times 3.7 = 932$ 人(1598年推定)

(本庄・蔵王共軒数の資料あり)

蔵王(港と兼ねる) $278 \text{軒} \times 3.7 = 1,029$ 人(1590年推定)

平林村(色部氏) $161 \text{軒} \times 3.7 = 596$ 人(1598年推定)

(平林・栖吉共軒数の資料あり)

栖吉村(長尾氏) $162 \text{軒} \times 3.7 = 599$ 人(1590年頃推定)

府屋村(大川氏) $67 \text{軒} \times 3.7 = 248$ 人(1598年推定)

(府屋・柿崎共軒数の資料あり)

柿崎村(柿崎氏) 52軒……195人(1598年資料)

○ 地方中心集落(在郷町)……越後の中世では未発達なので人口は少なめに推定

十日町 1755年……511軒

1598年頃 $511 / 4.5 = 114$ 軒

同 人口…… $114 \times 3.7 = 422$ 人(推定)……大規模集落人口400人

新井村	1772 年……279 軒
1598 年頃	$279 / 4.5 = 62$ 軒
同	人口… $62 \times 3.7 = 229$ 人 (推定) …中規模集落人口200人
六日町	1755 年……188 軒 (1598年時は城下集落)
1598 年頃	$188 / 4.5 = 42$ 軒
同	人口… $42 \times 3.7 = 155$ 人 (推定) …小規模集落人口100人

○ 漁業・塩業等の集落

1598 年……	一村当たり平均 20 軒
同	人口… $20 \times 3.7 = 74$ 人 (推定) ……70人

以上の基準数値を基に、現在の市町村域ごとの石高を基本に人口を計算し、同一区域内にある港町・城下集落・地方中心集落・漁業等集落の人口を補正したのが表の推定人口で合計16万2千人強となった。この推計には領主初め侍身分とそれに仕える者は入っていない。文禄3年(1594)の定納員数目録によれば景勝の家臣団の総数は二千名に近いが、これには在番衆として信濃・佐渡・出羽等に在住する者もあり、また、江戸時代に手を加えられたとも言われているので、そのまま加算できない。それに各家臣に所属する家族・小者等も不明であるが数万人(2万人位か)であることは明らかである。

さらに春日山城下(府内)の規模も不明であるが、阿賀北の在地土豪の雄である本庄氏の城下は250軒台、人口千人級であることから、戸数千単位・人口も数千人と考えられる。これらを考慮した越後国の総人口は少なくとも18万人台、多くとも20万人以下の範囲と推定できる。この人口数は現人口の1/10の24万人より少ないが、これは当時の灌漑技術では開発できない未開拓地が全国に比して多く残っていたことを示している。

この項を書くのに色々資料を調べているうちに、16世紀末から19世紀半ば(明治元年は1868年)にかけての一軒当たりの人口の推移が次図のようになり、そこには種々考えさせられることが含まれていることが判った。何分にも古い資料は調査条件も一様ではなく、その時々情勢に応じたものになっているので判断は難しいが、図から読み取れる事柄を記してみる。

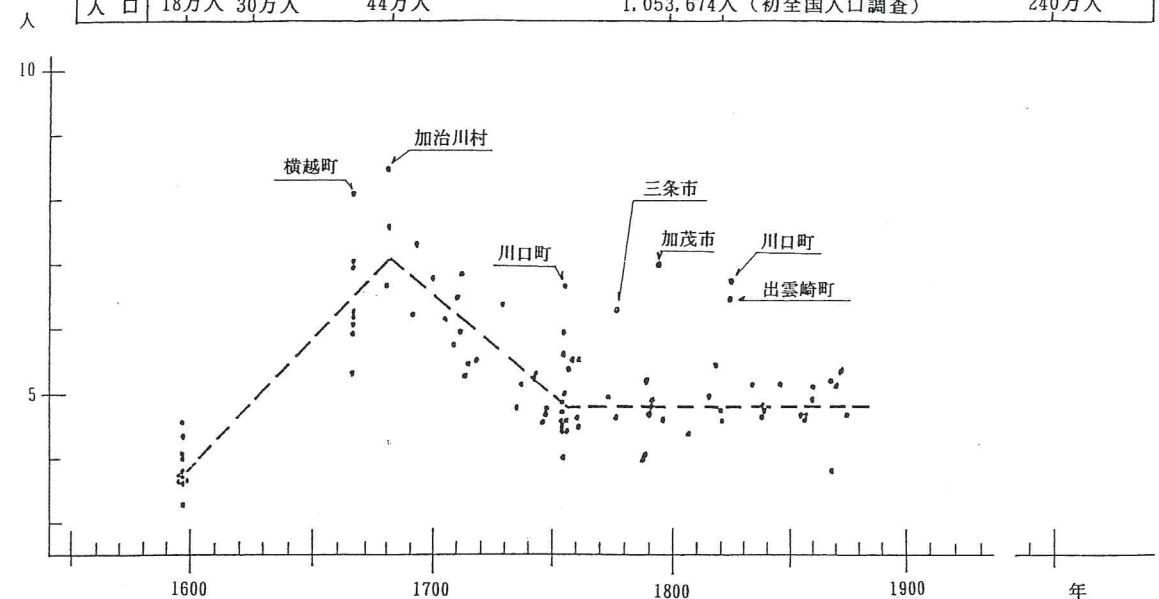
- (1) 1590年代の一軒当たり人口は平均3.7人と意外に少ない。当時の越後は中世の色濃く、士農の分離は進まず、商工も未発達であった。したがって上杉家臣団もほとんどが在地土豪で、集落はそれら土豪と一体であり、村民は郎党・小者・雑役等に駆りだされ各地在番に付いていて、その分少なくなっていると考えられる。
- (2) 1600年代から1680年代の天和検地までの80年間は全国的に開田が進められ、人口も急激に増加した時期でもある。越後も同様で、開田によるゆとりから一軒当たり人口も平均7人を超えるようになった。ただし、1600年から約70年間は検地の記録が少ない。これは開田が盛んで度々検地の必要が生じ、その都度、元の記録を残すと紛争のタネになるので、焼き捨てられたことを意味している。
- (3) 1682年の「越後騒動」後の高田藩遺領で実施された天和検地は、その後の江戸時代を通じて基本とされた検地で、旧検地に比して45%もの増高となった。その後は新田開発があった場合、その都度即座に検地が実施されるようになり、各集落に余

裕は無くなり、1700年代後半から明治にかけて、平均4.8人台に落ち着いていった。

- (4) 1700年代は河川の治水により洪水危険地帯まで新田開発が進められたが、未だ治水技術は未熟で洪水との闘いであった(信濃川・阿賀野川洪水の表参照)。検地の厳しさに加えて自然災害による飢饉との闘いで、農村には生活のゆとりが無くなった時代である。表の1600年代の洪水が少ないのは危険地帯を避けて田畠が開発されていたことを示している。
- (5) 時代時代に一軒当たりの人口が特に多い所は横越村(横越島…阿賀野川自然堤防)加治川村(塩津潟につらなる沼沢地の山沿い)、川口町(信濃川流域)、加茂市(加茂川と信濃川との自然堤防)、三条市(五十嵐川扇状地)等開発開田が進んだ所で、未だ年貢対象外の新田が多く、その時期には集落にゆとりがあったことを示している。

一戸当たりの人口の推移(越後国)

年	1597	1645	1682	1798	1840	1990
生産高	39万石	約60万石	87万石(天和検知)	約120万石		
人口	18万人	30万人	44万人	1,053,674人(初全国人口調査)		240万人



信濃川洪水	19回	43回	34回(1868年まで)	
阿賀野川洪水	6回	44回	28回	

歴史的できごと

一六〇三 江戸幕府開かれる

一七〇七 富士山噴火
一七三〇 松ヶ崎開削一七八四 天明の飢饉
一七八三 浅間山噴火

一八二一 新川完成

一八六八 明治元年

一八九六 横田切れ

■1598年越後国の石高と人口（推定）

郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)	郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)
岩船郡	山 北 町	2,700	1,230	中蒲原郡	横 越 町	300	120
	朝 日 村	8,200	3,320		小 須 戸 町	1,200	460
	神 林 村	6,600	3,100		村 松 町	6,500	2,670
	荒 川 町	3,500	1,330		五 泉 市	5,500	2,090
	関 川 村	2,200	940		新 津 市	2,500	1,150
	村 上 市	3,300	2,850		白 根 市	3,300	1,250
	小 計	26,500	12,770		小 計	24,010	10,370
北蒲原郡	黒 川 村	2,400	1,110	西蒲原郡	巻 町	5,200	1,970
	中 条 町	5,500	2,380		西 川 町	2,000	760
	加 治 川 村	2,200	1,040		黒 崎 町	900	340
	紫 雲 寺 町	40	90		味 方 村	600	230
	聖 籠 町	30	150		潟 東 村	400	150
	新 発 田 市	12,500	5,550		月 潟 村	800	300
	豊 栄 市	80	30		中 之 口 村	1,500	570
	豊 浦 町	2,800	1,070		吉 田 町	4,500	1,710
	京 ケ 瀬 村	220	90		岩 室 村	2,300	1,170
	水 原 町	4,700	2,390		弥 彦 村	1,500	1,020
	笹 神 村	3,000	1,340		分 水 町	3,200	1,220
	安 田 町	1,800	890		小 計	22,900	9,440
	小 計	35,270	16,130				
中蒲原郡	新 潟 市	4,700	2,630	南蒲原郡	田 上 町	800	300
	亀 田 町	10			中 之 島 町	3,000	1,140
					栄 町	8,600	3,300

郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)	郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)
南蒲原郡	下 田 村	3,100	1,180	刈羽郡	小 計	31,100	13,670
	加 茂 市	5,000	2,300				
	三 条 市	10,000	4,300		小 千 谷 市	7,000	2,860
	見 附 市	8,500	3,430		川 口 町	800	300
	小 計	39,000	15,950		堀 之 内 町	1,900	720
古志郡	山 古 志 村			北魚沼郡	小 出 町	1,700	650
	長 岡 市	28,500	12,430		守 門 村	500	190
	栃 尾 市	4,900	2,060		広 神 村	1,700	650
	小 計	33,400	14,490		入 広 瀬 村	100	40
					湯 之 谷 村	1,000	380
三島郡	与 板 町	2,800	2,060	南魚沼郡	小 計	14,700	5,790
	三 島 町	4,900	1,860				
	越 路 町	3,500	1,330		大 和 町	3,000	1,140
	寺 泊 町	5,700	2,600		六 日 町	7,400	3,110
	和 島 村	6,800	2,680		塩 沢 町	9,000	3,420
	出 雲 崎 町	4,100	1,860		湯 沢 町	500	190
	小 計	27,800	12,390		小 計	19,900	7,860
刈羽郡	西 山 町	4,100	1,630	中魚沼郡	十 日 町 市	3,800	1,850
	刈 羽 村	3,000	1,340		川 西 町	2,500	950
	小 国 町	1,500	570		中 里 村	400	150
	高 柳 町	500	190		津 南 町	1,000	380
	柏 崎 市	22,000	9,940		小 計	7,700	3,330

郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)	郡名	市町村名	石 高 (石)	人 口 (人)
東頸 城郡	松 代 町	300	210	西頸 城郡	青 海 町	1,000	380
	安 塚 町	1,100	520		糸 魚 川 市	7,500	2,850
	大 島 村	600	230		小 計	10,700	4,060
	牧 村	1,100	420	中頸 城郡	計	372,840	158,350
	浦 川 原 村	1,700	650		青 所 生 産 高	10,000	3,800
	松 之 山 町	400	150		港 生 産 高	7,300	
	小 計	5,200	2,180		海 産 物 等	2,000	
中頸 城郡	三 和 村	9,800	3,730		合 計	392,140	162,150
	柿 崎 町	6,400	2,630	東蒲 原郡	三 川 村	1,700	650
	吉 川 町	5,800	2,200		津 川 町	1,800	1,280
	頸 城 村	1,900	720		鹿 瀬 町	1,400	530
	大 湊 町	360	280		上 川 村	3,800	1,440
	板 倉 町	10,000	3,800		小 計	8,700	3,900
	清 里 村	2,700	1,030	西頸 城郡	名 立 町	800	300
	中 郷 村	400	150		能 生 町	1,400	530
	妙 高 村	700	270				
	妙高高原町	100	40				
	新 井 市	12,700	5,030				
	上 越 市	23,800	10,040				
	小 計	74,660	29,920				
西頸 城郡	名 立 町	800	300		総 合 計	400,840	166,050
	能 生 町	1,400	530				

上杉家臣団の配置

越後上杉氏が戦国大名に成長し、その体制が整うのは、長尾景虎（後の上杉謙信）が天文17年(1548)12月30日春日山城に入り、越後守護代に就任した時を出発点とする。当時の越後は、府中を中心とする上郡には越後守護上杉氏の一門、家臣が在地し、特に魚沼地方には長尾一族の長尾政景が勢力を強めていた。また、中郡には柏崎上条の上杉氏一門を始めとして、栖吉長尾氏・三条長尾氏・毛利氏（北条・安田）・斎藤氏・直江氏・小国氏等の国人が割拠し、阿賀野川以北の下郡（揚北又は阿賀北地方）には鎌倉時代以来の三浦和田氏（中条・黒川）・佐々木氏（加治・新発田・竹俣）・大見氏（安田・水原）・畠山氏（本庄・色部）等の一族が半独立国として勢力を張っていた。

越後守護上杉定実の死去（1550年）に伴い、守護代から事実上の守護となった景虎は坂戸城の長尾政景を屈伏させて長尾一族の統一を行い、これを契機にして国人士豪を軍事上指揮の支配下に置き、戦国大名としての体制を整えていった。

これらの過程の中で、春日山城を中心とした上郡では上田（南魚沼郡）長尾氏の当主政景の死去に伴い、その子景勝を謙信の養子とすることにより上田衆を体制内に組み入れ、直轄化を完了し、中郡では反対勢力であった三条長尾氏を亡ぼし、山吉氏を三条城に配置して要を押さえるとともに、国人北条氏を力で押さえ込むことにより領主権の確立を進めていった。その後北条氏は、謙信の関東進出に伴い、小田原北条氏・甲斐武田氏に対する関東前進基地司令官として厩橋（前橋）城で活躍することになる。下郡においては、保守色の強い国人士豪を謙信時代にはまだ完全な支配と領国化に至らなかったが、武田信玄と結んで背いた本庄繁長を攻め（永禄11年）屈伏させることにより、越後国の盟主として軍事上の指揮権を確立した。以上、謙信時代の上杉家臣団の配置が表の左側である。

上杉謙信の突然の死により、養子の景勝（謙信の甥）と同じく養子景虎（小田原北条氏出身）との相続争いである御館の乱（天正6年から同8年）で国内が分裂抗争したが、景勝の勝利により反対派の有力豪族を亡ぼし、または直江・大国兄弟に代表する上田衆出身者に名跡と所領を継がせることにより、謙信時代の旧体制にとらわれない領国支配が進められた。そしてさらに、これを加速したのは天正10年の武田氏滅亡と本能寺の変による織田信長の死であり、豊臣秀吉と結ぶことで外敵の心配なく国内の統一を図った。特に天正9年以来反抗していた新発田重家を同15年に亡ぼし新発田城を番城とし、天正19年下郡の最大の豪族本庄繁長が、出羽庄内の仕置きが原因で秀吉により改易となるに及んで、本庄城は信濃出身の春日元忠が城代に任ぜられ、本庄領は大国預かりとすることで越後の完全な上杉領国化が完成する。この時代の番城と家臣団の配置が表の右側である。

■番城と家臣団の配置表

番城名	謙 信 時 代	景 勝 時 代	そ の 他
春日山城	本城	本城 留守黒金上野介 2,349石（上田衆）	
根 知 城	村上義清・国清父子	桜井三助 667石	（上田衆）
不動山城	山本寺定長（一門）	山本寺景長 1,060石	琵琶島保共
直 嶺 城	番城	樋口兼豊(伊予守) 809石 直江兼統父(上田衆)	
柿 崎 城	柿崎晴家	柿崎弥次郎憲家2,861石	慶長 2 年御叱
坂 戸 城	長尾政景（景勝父）	留守栗林370石・深沢202石	（上田衆）
琵琶島城	琵琶島弥七郎	山本寺景長（一門）	不動山城共
上条館城	上条政繁（一門）	上条政繁、後村山慶綱	政繁天正14年出奔
北 条 城	北条高広（丹後守）	桐沢具繁（但馬守）	（上田衆）
安 田 城	安田顕元（宗八郎）	安田能元（上総介） 2,474石	
赤 田 城	斎藤朝信（下野守）	斎藤三郎右衛門3,367石	慶長 2 年御勘気
萩 城	松本景繁（大学）	松本大炊助 1,580石	現小木城跡（信濃出）
与 板 城	直江景綱（大和守）	直江兼統（山城守） 53,217石（上田衆）	
栖 吉 城	上杉景信（一門）	長尾紀伊守 369石・左近司伝兵衛 324石(上田衆)	
蔵王堂城	河田長親（豊前守）	堀川左兵衛 1,060石	（上田衆）
栃 尾 城	本庄秀綱（清七郎）	清水内蔵助 958石	（上田衆）
天神山城	小国氏	大國実頼(但馬守)9,041石 直江兼統弟(上田衆)	
黒 滝 城	山岸隼人佐	山岸中務少輔 2,277石	深沢刑部子（上田衆）
大 面 城	丸田（伊豆守）	泉沢久秀（河内守） 5,643石（上田衆）	

上杉家臣団の配置

番城名	謙 信 時 代	景 勝 時 代	そ の 他
三 条 城	山吉豊守のち神余親綱	甘糟長重（近江守） 1,717石	
加 茂 城		本庄豊後守 2,298石	繁長子、慶長 2 年御叱
神 戸 城	菅名与三	丸田周防守 711石	
木 場 城		山吉玄蕃介 422石・蓼沼日向守 213石	
新津館城	新津勝資（丹波守）	新津秀祐（丹波守）911石	
水原館城	水原能化丸	水原親憲（常陸介） 3,414石（上田衆）	
安 田 城	安田新太郎	安田筑前守 1,232石	
笹 岡 城	山浦源吾（村上国清）	今井源右衛門 371石	（上田衆）
新発田城	新発田長敦（尾張守）	宮島三河守 950石	（上田衆）
加 地 城	加地彦次郎	加地（某） 662石	慶長 2 年御勘気
竹 俣 城	竹俣慶綱（三河守）	竹俣利綱 921石	
中 条 城	中条景泰（越前守）	中条三盛（与次） 1,865石	
黒 川 城	黒川清実（四郎次郎）	黒川為実（左馬介） 1,665石	
平 林 城	色部顕長（弥三郎）	色部龍松丸 4,868石	
本 庄 城	本庄繁長	春日元忠（右衛門） 2,308石（信濃出）	
大場沢城	鮎川盛長（孫次郎）		大國氏預かり
大 川 城	大川氏	大川氏	
直 路 城		長尾伊賀守 260石	（上田衆）

参考 謙信時代は「天正初年軍役帳」より

景勝時代は「文禄 3 年定納員数目録」より

表中の石高は本納高

上杉景勝時代番城配置図

上杉景勝時代番城

- | | | | |
|--------------|------|--------------|------|
| 1. 春日山城 (本城) | 上越市 | 19. 大面城 | 栄 町 |
| 2. 根知城 | 糸魚川市 | 20. 三条城 | 三条市 |
| 3. 不動山城 | 糸魚川市 | 21. 加茂城 | 加茂市 |
| 4. 直嶺城 | 安塚町 | 22. 神戸城 (菅名) | 村松町 |
| 5. 柿崎城 | 柿崎町 | 23. 木場城 | 黒埼町 |
| 6. 坂戸城 | 六日町 | 24. 新津館城 | 新津市 |
| 7. 琵琶島城 | 柏崎市 | 25. 水原館城 | 水原町 |
| 8. 上条館城 | 柏崎市 | 26. 安田城 | 安田町 |
| 9. 北条城 | 柏崎市 | 27. 笹岡城 | 笹神村 |
| 10. 安田城 | 柏崎市 | 28. 新発田城 | 新発田市 |
| 11. 赤田城 | 刈羽村 | 29. 加地城 | 新発田市 |
| 12. 荻 (小木) 城 | 出雲崎町 | 30. 竹俣城 | 新発田市 |
| 13. 与板城 | 与板町 | 31. 中条城 | 中条町 |
| 14. 栖吉城 | 長岡市 | 32. 黒川城 | 黒川村 |
| 15. 蔵王堂城 | 長岡市 | 33. 平林城 | 神林村 |
| 16. 栃尾城 | 栃尾市 | 34. 本庄城 | 村上市 |
| 17. 天神山城 | 岩室村 | 35. 大川城 | 山北町 |
| 18. 黒滝城 | 弥彦村 | 36. 直路城 | 塩沢町 |

上杉謙信時代関東と結ぶ城

- | | | | |
|----------|------|----------|-----|
| 4. 直嶺城 | 安塚町 | 39. 樺野沢城 | 塩沢町 |
| 37. 犬伏城 | 松代町 | 40. 荒戸城 | 湯沢町 |
| 38. 琵琶懸城 | 十日町市 | 41. 寄居城 | 湯沢町 |

